47-60

4619

雅詩

白雪

特49
635

作詩自在序

詩者志也。志之所鍾。發而形之詩。々果不要法乎。不而作詩猶爲合無紀之師。動則敗焉。況欲凌三唐乎。讀古書學古法。而後述其所志。則三唐漢魏亦可臻焉耳。彼學古者。或孫吳或六韜三畧。几々以攻其法。虞翊減竈之計奇矣。而襲孫臏之故智。李靖六花之陣妙矣。而出孔明之遺計。名將之行兵。名家之作詩。未嘗不學古法矣。」頃者文林閣。集古人之詩論。名曰作詩自在。以爲初學作詩之楷梯。苟初學自此楷梯而進。則三唐漢魏豈不易臻哉。然則此書是詩家之孫吳耳。六韜三畧耳。若能鍊熟其

五經堂藏書

法。則長短自在。筆鋒犀利。所向無敵。遂逼古人之壘。而樹赤旗於詩壇固不難也。雖然。知讀書而不知用之。猶趙括談兵者。則非此書之責也。蓋至運用之妙。則待如虞李其人者而已。是爲序。

明治壬辰二月上浣

東都　齋藤樂堂撰

凡例

一世上詩法詩格を說くの書甚多し。然れども其弊詩法之を羈束し遂に初學をして窠臼に陷るに至らしむ。予等病之を束縛し遂に初學をして窠臼に陷るに至らしむ。予等病む。是に於て乎詩人の識得すべき要訣のみを摘記し以て剞劂に附す。彼の詩法詩格に羈束せらるゝ人沈味翫索せば蓋ゝ詩を作るに際して自由自在たるに庶幾からんか。

一深理に走るもの空談に陷るもの皆之を去り力めて作詩の要訣を說き以て作家の良資を期す。然りと雖も詩學極めて弘し。此の一冊子豈よく說盡精述することを得んや。是を以て往々一を執て百を概す。讀者之を諒せよ。

一上梓の擧皆に之に止るにあらず。初學の金條玉科となすに足るもれを得ば又直ゝ梓ゝ上さん。

編者誌

作詩自在目次

●詩學部

◎總論

詩學の由來　眞情と客情　景と情

意と句と格　題れ難易に付ての心得附題の大小ゐ

付ての心得　詩人の家風と長處

◎作詩の妙訣

詩人の心得　詩を作る時の心得　詩人の癖

◎古詩れ評論

古詩を讀む時れ心得

懷古　送行　閨情　寫景　幽野　羈旅

◎疊字と連綿字

疊字の用例　連綿字れ用例　連綿字を倒用する事

●品題部

◎題を定むる法

◎題の種類

句題　故事題　地名題　即興題

◎和歌題を用ゆる事

春夏秋冬の用例　戀れ用例

●押韻部

◎韵を取る心得

◎韵脚の痼疾

陳腐　軟弱　鵝脂　輕浮　停滯
拙劣　不穩
◎押韻の心得
◎韻礎の心得
席上よて韻礎を定むる法　分字の法
古人の作例　和韻と次韻の區別
●附錄部
◎五言律作法　並よ平起仄起
◎七言律作法　並に平起仄起
◎五言絶句作法　並ゐ平起仄起
◎七言絶句作法　並に平起仄起

作詩自在

東都　文林閣纂輯

詩學

上古葛天歌を操り皇娥瑟に倚る其音太初に協ひたり未有の人文に發し自然の天籟に得降て耕鑿謠を興し明良頌を賡するに至り以來類を分ち部を撰し則即ち炳たり赫たり法即ち美たり善たり佩文出て含英出て金聲玉振の全を集め香草艶詞の用よ適ふ是よ於てか詩學始めて大成す

詩ハ志なり情志の之く處に隨て見聞すること感覺そるよとを作るものなり然れども其志に邪あからんよとを欲す故に詩三百一言以蔽之

曰思無邪と。而して此情志に眞と客とあり。眞情に出たるの作は里巷の歌謠童幼の口占と雖も能く文理に合ひ自ら風韵を具ふるものなり。客情より出たるれ作は假令語新奇を欲し句壯麗を求むと雖も。翫味沈吟する時は思舒びず意縮り情浮虛にして遂に風雅れ源に遠ざかる。日に千言を積むと雖も世敎を助け人心を補ふゐとはなかるべし。關々雎鳩在河之洲と云ふは景の眞なり。窈窕淑女君子好逑と云ふは情の眞なり。此の如く眞景眞情を述て聲氣始て和暢に風神則ち優長なり。又强て奇を索め異を探らんと思ふ情を皆直に客情と云ふ。此情去りて初て詩境に入るを得べし。

凡そ詩を作るゝ景と情との二に過ぎず。或は偏に景を寫し或は單に情を述べ。或ゝ景中情を兼ね或ゝ情中景を入る。又始より景情相兼て作るあり。詩は惟此の如くある而已。而して同く景を寫し情を述ぶるにも語脉れ續け方格の高下によりて好詩とも惡詩とも變ずる者なり。是等の事は鍛練を積み老熟に至れゞ自ら了得すべし。

語を聯ねて句となり句を聯ねて詩となる。故に語の下し方に由て句の高下を來し。句の續け方に由りて詩の巧拙を生ずるもれなり。意高妙なりと雖も語拙劣なるときは好詩となる能はず。意と語と相融合し初て其妙を顯すものなり。故に古人も意高妙、句高妙、格高妙と分ちたり。然れども能く研究練磨する時は意句格とも高妙となりて懸隔なき者あり。先づ初學は語を下すゐとを知り語脉を貫くゐとを知り語の緩急を知るを要と。此三を知るとき句を作るを得べし句ゝ猶人の体の如し。人は五臟六腑を稟け十二脉内を環り百骸外を束ぬ。若し然らざる時ゝ神氣を舍す能はず。詩亦然り。體格正しからず語脉通せざる時は神氣を寫す能はず。神氣なくんゞ死句なり。句已に死す何ぞ詩と稱するを得んや。

詩を作るに、容易なる題は、深く思を回し遠く心を用ゐ。困難なる題は却て輕々筆を着け淡々叙し去るべし。又先陽庚尤の如き韻の廣きは韻字を約して短篇を作り。江肴咸覃の如き韻の狹きは却て韻字を重ねて長篇を作り。以て其技倆を示すべし。又題の大なるは小さ作りなさ。題の小なるは大に作りなすべし。此れ如く意を用ゆるときハ自ら奇警新穎なる作を得るに至るべしと古人は云へり。今左に其例を擧ぐ。

薩埵嶺望富士山　大窪詩佛

唯有孤峯常戴雪。銀山拔出萬青螺。此觀曾在畫圖見。今比畫圖雪較多。青螺ハ山を云ふ。一二れ意ハ孤峯が常に雪を戴きて多の山に拔出すとのみにて他意なし。三四は此景を曾て畫にて見しことあり。去が今其畫に較ふれバ雲が較多しとなり。嘗歎たる富山を畫圖に寄せて輕々筆を收むる所却て妙なり。是即ち大なる題を小さ作りなしたるものなり。

梅　菅茶山

尋梅舊不憚荒避。老病如今日在家。桃上清香數枝雪。看成庾山嶺滿山花。

庾嶺は地名あり。其意は梅を尋ねて以前は途の遐きも厭はざりしが今ハ老ひ且病て日々家にあれバ梅を尋ぬることも出來ず。されバ枕上の五六枝の梅花を庾嶺と云ふ山に滿ちたる花と見做して樂めりとあり。數枝の梅花を庾嶺を以て結びたる所却て妙なり。是れ即ち小なる題を大に作りなしたるものなり。

古往今來詩人雨の如く多し。杜李以下其聲名を後世に傳へたるもの又幾千人なるを知るべからず。其中に就て衆体悉く妙を得たるものは纔ゐ杜甫一人のみ。其他は或ハ此に得彼ゐ失し漸く一家風をなしたるに過ぎず、故に詩を學バんと欲する人は其家風と長所とを知らざるべからず。李青蓮が好む所は斯く。王摩詰が好む所は斯く。歐陽修は如何。梅聖

俞は如何、東坡が俊邁、山谷が奇堀。各其家風と長所を存せざるなし。此理を識得せざる時は自ら詩を作るに當り遂に一家風を超す能はず。纔ゐ詩境よ迷行して已まん而已。

詩人の境に到り風雅の趣を辨せんと欲する人い平生勤行せずんゞわるべからず。初めは絶句の三四百首も律詩の百首も。或は一句二句一聯二聯つゝも古人の名句を記得暗誦して且夕翫味すべし。然る時は遂に句を吐き詩を作り得るに至るべし、又何人と雖も我肺腑に適する所の詩集二三部を熟讀して其風体句格趣向等を沈潛反覆して學習すべし。諸家れ集を多讀すと雖も心紊れ氣散する時は記得する能いず。只一標細と雖も沈味翫索するときは其功却て大なるべし。作詩の上達せんことを欲せゞ日毎に一首二首つゝ怠りなく作るべし。彼の國宗朝の時梅聖俞は一日に一首つゝ、老後に至る迄怠らずして作り。陸放翁い七十八日の間一百首を作る。是れ強て詩數の多きを好むゐゐらず唯此の如く勤勉するゐゐるれみ、古の詩傑そら猶且然り況や後進初學をや。姜白石曰く多看自知。多作自好と。夫れ詩話詩集を多讀する時は詩の格式句法自ら明ならん。又篇を重ね章を疊て多作するときは詩の趣向作意自ら妙ならん。此言寔に以あるなり。然れども篇を重ね句を積むよ當り工夫を費し精思を焦そよあらざれば眞に逼るの佳想は生ずべからず。疵瑕を尋ね風味を味ふにあらざれゞ千萬首の作も其功おかるべし。故人も樂天長短三千首、還愛韋郎五字詩と云へり。喩へゞ猶ほ碁を學ぶもの苦思焦慮せざる時は其技の上達すること能はざるが如し。姜白石又曰く詩之不工只是不精思耳、不思而作雖多亦奚以爲と。初學詩を作り得る毎よ吟味して瑕瑾あれば直に改むるを厭はざるときい自ら熟するに至るべし。初めよりして一足飛に詩境を踏み前賢を摩せんと欲するい梯な

くして高に登り楫なくして舟を遣らんと欲すると一般あらん。

詩を作らんと欲せバ鄙野の念陋醜の情をなすべからず。然らざる時ハ格律高尚風神優長なるを得べからず。然りと雖も詩人取る處の材料唯是れ天地の雲物山川の草木人情の喜悲の間にあるのみ。其之を取るに當り邪惡の心を捨て清眞の眼を以て之を見れば耳朶に達するもの瞳孔に入るもの哀にして興あるあり喜にして興あるあり其趣を描して辞に現す是れ即ち詩なり。詩を作る豈に他ふ奇僻の想瞼高の望を着くるを須ゐんや。後世少陵を目して千載の詩聖と稱する所以のもの他なし苟且に作るの篇徒然に出たるの詩猶且つ風を傷し國を憂へざるなく時を感ぜ景に觸れて忠誠の氣激昂せざるなきによるのみ。篇を重ね堆を爲すと雖も無用の曠言無益の虚辞は乳雀れ啁啾鳴蛙れ嘈囃たるが如きのみ。

詩を案ずるは人々其氣質によりて變するものなり。故ゑ故人も三上の吟と云へり。其壹ハ馬上の吟なり。馬に騎て山野を閑行して趣を求むるを云ふ。其二は枕上の吟なり。安臥して句を覓むるを云ふ也。其三ハ圊上れ吟なり。圊中にありて句を推敲するを云ふ。然れども初學は只多首を貪るの心なく一句にても自ら點削鍛錬して改むるを嫌ハざるを簡要とす。昔陳師道ハ門を閉て句を練り。秦少游ハ客に對して毫を揮ひ。李白は酒興留連れ坐に好句成り。韋蘇州は默坐炷香れ時ゐ佳作成る。前哲猶此の如く一癖あり況や後代の詩人をや。我朝にても藤原定家は衣冠束帶して沈思し西行法師は山野を散歩して佳作を得たり。此れ詩歌其揆一なればなり。初學の人漫に篇の多からんゐとを欲し徒に作詩の速ならんゐとを願ふ。是れ皆風雅の痼疾なり。詩數を欲せず遲吟も愧ちず唯格律句意の人に及ばざるをのみ是れ恐るべきなり。

古詩を讀で其意を知るを得ざれば千書萬籍を繙くと雖も遂に古人の跡を踏み古人の堂に升るあたはず。然れども詩の好惡を品評するまと又容易の事にあらず。自ら悟入する所の淺深によりて其着眼する處に高下あり。故に初學は强て其好惡を分つべからず。唯其大意を辨すれば即ち已むべし。

景を寫すに種々あり。或い濶きあり遠きあり或い直に寫すあり婉て寫そあり。濶きとは其見る所の濶を作る。李伯が詩の天晴一厂遠海濶孤帆遲の如き即ち是あり。遠きとは其見る所の遠を作る。承慶が山遠疑無樹溯平似不流の如き即ち是なり。直とは其見る所の景を直に作意を付けずして寫すを云ふ。岑參が江村片雨外野寺夕陽邊の如き即ち是なり。婉とは其見る所の景を外に趣向を付けて作るを云ふ。審言が徑轉危峯逼橋斜峽岸坊の如き即ち是なり。

幽野は詩は江村田家の景光の幽清なるを寫すを專とす。祖詠が簷前花覆地竹外鳥親人と云へる句は言外に幽趣あり。花の檐前を蔽ひたる邊に又竹外より鳥ゞ人を親ふい其凄涼たるゐ由るあり。幽野の詩は斯の如く一幽字を着けず一凄字を入れずして幽凄の意十分なるを佳とす。羈旅の詩い見る所の景を描し逢ふ所の情を述るに過ぎざれども猶景情の際に旅泊凄絶の趣を寫さ得るを妙となす。温庭筠が早行の詩に鷄聲茅店月人跡板橋霜と作り。送僧の詩に燈影秋江寺鐘聲夜雨舡と作るが如し。前詩は茅屋の上に曉の月影が殘りたる時鷄が鳴き板橋の霜れ上に人の渡りたる足跡が見ゆるとなり。後詩は秋江の寺の邊を過ぐれば燈の影がほのめき。夜雨の時舟に乘れば鐘れしづくが滴るとなり。二詩共によく旅曉凄寂たるの光景を寫し得たるものにして此の如き境に遇ひたるとき初めて此詩の妙を知るを得ん。

懷古れ詩は古宮古寺又ハ古戰場等の遺跡に到て古を懷ひて作るを云ふ。或は古を慕ふの情を陳べ或は今見る所の景を賦そ。牧之が江山九秋後。風月六朝餘と作りたるは懷古の情尤も深し。江山の邊を見れバ九秋の後にて木葉も脫落して景色自ら物淋しく。風月を愛して停れバ六朝の跡の荒れはてる餘にて只感慨の起るのみ。星遷り物變ずるも獨り江山風月は依然として舊時に異ならず。然るに九秋れ後六朝の餘なれバろれさへ却て恨めしとなり。此の如きの句初學宜しく咀嚼すべし。

送行の詩ハ或は情を本とし或ハ景を本とそ。韓愈か句ゐ飲中相顧色送後獨歸情と云へるハ情を本とせり。其意は今友に離れんとて酒宴を催すと雖も此を終れバ別るゝかと思へバ盃を擧ぐる間にも互ゐ顏を見合せて自ら愁を含む。將に別れんとする時已に此の如し。況や友を送りて後猶悄々として歸る時は如何ならんとなり。又許渾が詩に住接猿啼處。行逢厂過時と云へるは景を本とせり。其意ハ姑く滯留すれバ猿の啼く處ゐて涙を流し。又立出て行けバ厂の飛ふ節にて愈故郷を戀しく思ハるゝとなり。

閨情の詩は情を深く作るを要す。景を述る中にも情を蓄へ樂めども落せず怨めども識るに至らざるを可とそ。杜荀鶴が風暖鳥聲碎。日高花影重と作りしハ妙句あり。能く景を寫し又能く情を蓄ふ。又權德輿が落花人獨立。微雨燕雙飛も寔に妙句なり。落花の比唯一人悄然と竚立する折。微雨にぬれて燕の雄雌が打連れて飛たるを羨むとの意あり。句意俱に佳絶初學須く此等の風韻を學ぶべし。

漫々霏々の如き同字を疊ぬるを疊字と云ふ。此疊字を句中ゑ狹入することと極て難しとなそ。一二の句に柳塘漠々暗啼鴉と云ひ夜色沈々曉漏遲と云ふが如きは甚だ思を勞そるを要せずと雖も。三四の句殊ゐ律詩

の對句に至ても最も難しとなす。昔し李嘉祐が詩に水田飛白鷺。夏木囀黄鸝と云ふ句あ王維が疊字を添へて漠々水田陰々夏木と成せしより妙となれりと云ふ。此の二句は功は唯漠々陰々の字よあるを以てなり又杜甫が無邊落木蕭々下。不尽長江滾々來と云ふ句も其功は疊字にあるべし。落木下長江來のみにて足れるが如しと雖も。蕭々下と云ひて初めて落木の無邊を悟り。滾々來と云ひて初て不盡の長江を知るを得べし。其形容し難きの景を此疊字を下せしより風趣倍蓰せり。蕭々わさびしき心。滾々は絶へず流るゝ心なり。東坡が混々爐香初泛夜。離々花影欲搖春と云ふ句の爐香の夜あ泛び花影の春を搖すと云へるも混々と云ひ離々と云へるによりて其形容大に妙となりたり。混々は香のひたそが如く蒸る意。離々ハ影の横斜になりて見定め難き意なり。

襲都逍遥は如き二字にして其意の連綿したるを連綿字といふ。連綿字も亦律詩の對句に尤も焦思すべし。連綿字を以て結ぶには瀲鶒刷毛花蕩漾。鷺鷥舉足雪離披の如きを可とす。刷毛は二字より花蕩漾と云ひ。舉足の二字より雪離披と云ふ。瀲鶒は鴛鴦の一種にして羽毛の美麗なる水鳥なり。鷺鷥も亦水鳥にして乃ち鷺なり。其瀲鶒が啄ひて毛を刷へは花の乱る如く見る。鷺が足を舉て居れば雪の散するが如く見ゆるとなり。蕩漾ハ波に物の漂ふ如くに物の亂るゝを云ひ。離披も亦物は亂れ散するを云ふ。又親人鳥喚悠颺夢。隔水山供宛轉愁と云ふ句も鳥と云へるより悠颺夢と云ひ山と云へるより宛轉たる愁と云ひたるなり。悠颺ハ舉る貌にして思ひも至らぬことを遠く夢見るを云ひ。宛轉ハまろぶ貌にして同じことを幾度もくりかへして愁るを云ふ。其句意と共よ好し連綿字若しくは疊字を用ゆるに當り此等の諸作の如く虚字とならざることを勤めざるべからす。又韻脚等に連綿字を以て和するに頗倒し

て用ゆる例あり。然れども理を害せざるを要す。韓退之が參差を差參とし玲瓏を瓏玲とするが如きは理を害せざるものなり。或は江湖を湖江とし紅白を白紅とし慷慨を慨慷としたるあり。然れども退之の如きは才豪なれバ其奔逸の勢に乘して用ゐたるものなれども後進は決して學ぶべからず。若し此等を學びたらんには後にハ麒麟を麟麒と云ひ。鳳凰を凰鳳と云ふが如き醜を見るに至らん。又常に顛倒するも亦可なるあり即ち圖畫を畫圖となし毛羽を羽毛となし羅綺を綺羅とする如き其類甚だ多し奔逸の勢に乘ずるとは喩へバ高處より奔馳し來りたるときおは頗る廣き溝渠を一躍して越へ得るが如し。本越へ能ハざる處なれども其奔馳し來りたる勢に乘して越へ得たるなり。然れバ其時越へ得たりと雖も常に越へ能はざるなり。故に連綿字も亦奔逸の勢に乘ずれバ顛倒せることを得べしと雖も奔逸せざる詩に之を入るれバ大お不可なり。初學輩其例あるを以て之を學バんが猶ほ鵝が鵝の体を學んで水に溺るゝが如し却て長く大方の家に笑はれん。

題

詩會の席おて題を定むるハは其席に列せる師範に請ふべし。若し師範れ來らざる時は其坐の老輩宏才に請ふものとす。騷壇の興ハ此題お屬ぜり。題若し新奇なる時ハ詩句も亦必ず好趣あり。故に題ハ好趣を得易きを可とす。或は時の風物或ハ坐の逸興に牽れて定むるものなれば始めより定むべからず。譬へバ其會の主人新宅お移居して其砌下に松樹を栽したらんには新居種松も可なるべく。其居を移せし處山林ならんにハ山林ト幽も可あるべし。或は新婚新誕れ賀筵或は旅行送別の離宴等何事に限らず斟酌すべきなり。或は簾外に山嶽を望むれ閣上、或は神社佛字に隣るの郊居。或ハ床頭に畫圖を貼ぜ。案上に香財を聚め、或は琴

碁、書、劍、酒、茶、主人の嗜好等に至るまで皆題に入れて可あり。

句題と云ひて句を以て題となすものあり。多く五言を用ゆ。或は六言七言も用ゐざるあゝあらざれども實に稀なりとす。譬へば花の題には花塢夕陽遲、弄花香滿衣、日高花影重、潤花燃暮雨の句、月は題には簾疎月到床、爲月從窓破、江清月近人、川上月難留の句を用ゆるが如し。

故事を以て題となすには舜耕歷山、禹平九州等より呂望非熊、孔明臥龍、濂溪愛蓮、明道隨柳、照君覽鏡、楊妃鬪花の類なり。何事ゐ因らず來歷あるものを用ゆ。故事題い識正しく理明ならざるべからず。彼れ土れ詞豪と雖も一時の作意に任せて筆を操り以て後世の譏を招きしもの少きにあらず。詩は道義の枝葉と雖も其議論の可否によりて心術の底學問の量を推すあとを得べき。故に宜く眼目を着くべきなり。獨吟にい殊ゐ理義に適切なるものゐあらざれば作るべからず。作り得て却て後世の笑を取らんよりい寧ろ作らざるの勝れるにわ如かざるなり。凡そ故事題には三種あり。一に曰く故事を議論して中正に落す。二に曰く故事を卒直に陳るの中に餘味を含蓄せゐむ。三に曰く故事れ餘意を述る是なり故人の作詩多しと雖も概ね之に過ぎず。

名所を以て題となすには其景光を描し得たるものゐあらざれば不可なり。然りと雖も着題あるときは意味窮迫して誦するに足らず。此間須らく苦思すべきなり。唐人金山寺に題を留むるもの甚だ多し然れども佳句少し。唯僅に張祐が樹影中流見、鐘聲兩岸聞と張紡が天多剩得月、地少不生塵と云ふ句を稠人尤も傳誦そるれみ。然れども識者猶以て至工となさず是れ句い佳なりと雖も其句落星寺と云ふ寺にも移すことを得るを以ておりといふ。後に王荆公が天末海雲横、此固、烟中沙岸似、西興と作れり之を以て尤も的切なりと稱す。是れ金山寺を上るにあらざれ

が其妙を知ることを能はず。北固の山名西興の地名なり。又岳陽樓の詩も夥多ありと雖も佳作太だ稀なり。僧の可明が水涵天影淵。山拔地形高と許棠が四顧疑無地、中流忽有山と云ふ句皆佳なりと雖も先の如く共に切ならず。唯孟皎然が氣蒸雲夢澤波撼岳陽樓のみ妙絶となす。其至難なること此の如し後進豈に刻意せずして可ならんや。是を以て之を見るに我國亦た吉野、月瀨、須磨、明石、嚴島、松州、墨陀等名區甚だ多し。故に題咏も亦甚だ多し。然りと雖も眞の佳詩に至ては蓋き少かるべし。故に人口に膾炙せるもの一もあるなし。是れ其好景に對せるも好趣を認めず佳景を賞するも佳趣を得ざるによるのみ。其名區にして古戰場の遺跡又は古英傑の遺事ある如き地なれば懷古の情を述ることを得るを以て好句を得やすし。我國にて富嶽の詩の如く其拙作尤も多きは蓋き之あるによるのみ。古來名所の詩の標準となせるは李白が鳳凰臺崔顥が黃鶴樓の二律となす。

登金陵鳳凰臺　李白

鳳凰臺上鳳凰飛。鳳去臺空江自流。吳宮花草埋幽徑。晉代衣冠成古丘。三山半落青天外。二水中分白鷺洲。伊爲浮雲能蔽日。長安不見使人愁。

此詩を讀で佳處を識得すべし。筆力勇健繩墨に拘らず珠の盤を走るが如し。唯光景を述て其中自ら感慨を含めり。

黃鶴樓　崔顥

昔人已乘白雲去。此地空餘黃鶴樓。黃鶴一去不復返。白雲千載空悠々。晴川歷々漢陽樹。芳草凄々鸚鵡洲。日暮鄉關何處是。烟波江上使人愁。

此の詩の格前詩と相似たり。唯黃鶴の一聯を異にするのみ。古人の文字對偶の工拙よりも意の貫通せるを要とせり。前半は故實を述べ後半は所見を述ぶ。是等の詩を參得せば詩意舒暢筆氣奔放此等の詩も如く絶

て工を欲せざる處却て至工を存するの妙を得るに至らん。即興の題い景を賦すれば瞩目所見等と云ひ。又情を述れば感懷所思等といふ。凡そ即興の詩は沈思苦慮せず見る所れ景を直率に寫すを可とす。故ゐ秀拔斬新なるを貴ぶ。然れども沈思して却て妙なるものあり。一溪春水闌何事皺作風前萬疊愁の如き律詩の對句の堦蟻相逢如偶語園蜂速去恐違程の如きは沈思より出て而して妙あり長廊無事青歸院盡日門前獨看松の如き看院只留双白鶴入門唯見一青松の如きは直率に出づ。而して同しく率直に寫せる中にても直に逼ると然らざるとあり。眞ょ逼るとは假令ば牛の野塘に横臥せるい何等の風情なきに似たれども妙手に寫すときは耕餘黄犢無人管自上横陂綠處眠の好句とあり。又鄕村の社祭に農夫の醉歸せるは何等の詩料にもならざるに似たれども妙手に寫すときい桑柘影斜秋社散家々扶得醉人歸の妙句となり讀者をして此れ如きの景も亦風趣あるが如く思はゝむるが如し。是即ち眞に逼る詩れ妙なり。

我國の詩人い我國の古人を咏し我國れ名處を咏するを以て和歌も亦以て資となすに足ることあり。且或は歌人と列席ゐたるとき或は歌人の祝賀の時の如きは和歌の題を用ゆるが大ゐ趣味あるものなり。故ょ我國の詩人に必ず和歌の何物たることを解し且必ず和歌の題を用ゆることを學習せざるべからず。四季れ題は彼國の四季の詩を標準として作るべし。而して詞和らかに義深からざるを可とす。又漢土の故事を入るゝも我國の故事を入るゝも可なり。今其作例を擧ぐ

六　如　菴

朝霞隔松春

春霞遮欄松樹林。朝暉未動翠沈々。輕風知自何邊入。彷彿隔簾聞鼓琴。

一二は其景を直率に述べたるにて乃ち春霞は欄を遮り朝日も未だ出

でされバ欄の前の松林は分明あらすして翠の色が沈みたる如く見ゆとなり。三四ハ同じく景を述べたるなれども婉曲にして結びたり。乃ち微風が何邊よりか入りたれば松風が起りたり其聲を聽くに簾を隔てゝ琴を聽くが如しとなり。何故と云ふに一二の句に云へる如く靄が遮り居れば松が判然せずして聲のみ聞ゆればなり。

待郭公　夏　　星巖

對床無語淡如忘。忽慢爭誇耳孔長。聽做杜鵑眞好笑。一聲叫月赤班唐。

忽慢ハかろんじあなどるを云ふ。赤班唐は郭公ふよく似たる鳥の名なり。其意ハ友人相會して床に對坐して談話をなさずして郭公ハ鳴くを待ち居れば茫然として何か忘れたるが如く物足らぬ心地せる折柄杜鵑ガ鳴きたりとて互に慢りて耳のよく聽へたるを誇りたるが其杜鵑と聽き做したるハ實ふ笑ふべきことにて其聲は赤班唐が月に叫びたるあり。

楓葉殘枝　秋　　六如庵

憶昨穠紅艶似春。風寒一夜便乾皺。梢頭唯剩兩三葉。盡附林間煖酒人。

其意は先頃までハ紅にして艶なること春の花の如くなりしが一夜風寒くなりてより乾皺したるに枝頭に二三の葉の殘り居るは何故ぞと云ふに是れは林間にて酒を煖むる人に與ゆるためあらんとあり。三四は作者が想像ゑて述べたるなり。

炭竈　冬　　逸氏名

雪苦霜辛知幾年。老翁八十鬢皤然。歲寒將問生涯淡。笑指風前一縷烟。

炭を製するは和漢同じく一般のことなるを以て彼土にも賢炭翁と云へる題あり。然れども其趣較異るを以て彼の例に拘るべからず。詩の意は雪霜の節苦辛して年々炭を燒く老翁ハ年も早八十許と見えて鬢も

白し。皤然は白きを云ふなり。歳寒の時い肉を燒き酒を温むるの設もなく生涯れ淡なることは如何あらんと問はんと思へば翁が推察して笑て炭竈れ邊ゐ一筋起る烟れ風に靡けるを指したりとなり。其意い此れ如く微細ある事なれども僅に朝夕の助となれば却て彼の役々營々利名ゐ奔走する人よりは勝るならんとなり。春夏秋冬の四首皆着意斬新筆路流暢にして初學此題を學ぶれ規範となすゐ足るべし。

戀の題は彼國の閨怨等れ詩と其類を同ふせり。故に漢土の故事を用ひ得て的切なるときは大に風趣ゐるものなり。今某氏作の詩を擧げて之を証す。

忍戀

帳裡燒殘爐底香。醜聲只恐出宮牆。三年泣血一枝玉。不知何時獻楚王。

此詩卞和が璞の古事にて作る一首の意は心安く君郎ゐ逢ふことも得ぬゆへ其愁情を慰めんと香ゐを燒きて只醜聲の世間に聞ゆることを恐る。醜聲とい不義の名を云ふ。昔卞和が璞を獻ずる三度ゐ及で始めて文王の時に珍寶となし卞和を侯に封せられたり。我も亦卞和が能く忍びたる如くなし居らんには又好時に逢て良緣を心安く契するもあらんとなり。又我國の古事を用ゐたるあり。

疑眞僞戀

人心翻覆忽天淵。紅縷何時結舊緣。影冷香閨門外月。回頭錦木未盈千。

此詩は陸奥の錦木の古事を借りて作りたるなり。其意い人心の變じ易きことは姑くれ間に天と地との如くなるが何時にか僞のなき人と舊緣を結ぶことを得べきか。天淵は天地と同じ義なり。紅縷は結の字に應せるなり。三四は人ありて我を戀ると雖も閨門月の冷ある夜に頭を回らして見れい門前に立てたる錦木い千束に足らざれい其人の眞意い

斗り難しとなり。昔奥州は風習に我戀る人の門前ゐ錦木を立て千束ゐなりたるときは逢はんと思ふ人は取り入れ然らざる人は其儘になしおくなり。彩色したる木なるが故に錦木と云ふ。

押韻

凡そ詩を作るゐは其韻を定むるを至要とす。廣き韻なるときは作り得て若し題に合いざることあれば大に耻辱なり。和韻は少も寛恕をべしと雖も然らざるときい尤も力を費さゞるべからず。才學れ淺深風藻の工拙の能く見はるゝは韵脚の如何にあり。韵脚とは一句の最下あるが故に斯く云ふなり。其れ人脚に少しく疾あるときい行歩自在ならず。詩も亦斯の如し一句の精神皆其韵脚に由て始て生ずるものなり。今其韵脚の瑕瑾を挙ぐ。

韵脚陳腐　古人の慣用せる句を採り來りて押韵する類なり。然れども斯の如き句を用ゐ得で却て作者の工を見はすことあり之を翻案換骨の妙といふ。花の詩に何等の意匠もなく爲誰紅又は香滿衣など作り。又月の詩に何等の經營もなく玉有華又は此心明など作るゝ即ち陳腐なるものなり。

韵脚軟弱　押得て力なきを云ふ。讀下するゐ當り句末に至りて一句の精神自ら衰るが如き感あるゝ即ち是なり。喩へゞ一二の句に終日樹頭看更奇の如き結句に皎月西流秋半空の如き類なり。結句の軟弱あるときい一首自ら力なきに至るを以て尤も刻意せざるべからず。

韵脚鵝腿　鵝の腿の重くして歩行の自由ならざるが如く韵字の働なくして重苦きを云ふ。喩へゞ雲霽時聽隔嶺鐘の句又新陰濃綠遶樓生の句の如くは隔嶺鐘と遶樓生の三字粘着するが故に大に不可なるが如し。

韵脚輕浮　輕浮い鵝腿と異りてかるはづみなるを云ふ。結句に至りて輕浮なるい甚だ不可なり。喩へば門を入て堂に舛り奥に到らんとして陷阱へ墜つるが如し。旅行の詩に回首前山漸欲曙。微雲一扶月猶明と作れるが如き。月猶明の三字輕浮あるを以て一首自ら羸弱振はず。

韵脚停滯　停滯とは韵を下せしに疾はなけれども只讀下すに當りて凝滯するをいふ。喩へは野望の詩ふ山頭風斷使雲遮の句の如く又は池邊の詩に荷放清香來去知と云ふ句の如き類此あり。使雲遮と來去知の字意は可なれども讀下するに當りて停滯す。

韵脚拙劣　句意い通ずれども語の拙きをいふ。學力薄き人は韵に苦ちんで遂に此病に陷ることあり。其題の如何により其結の工拙により て好字も却て拙となることあり。例へば炎蒸矮屋人難住。蟬在高陰飲露鳴句の如き是なり。此れ結び得て拙なるもの也。

韵脚不穩　義も通じ文字も下し得て瑕疵とあるにあらざれども未だ煅煉を經ざるが如き句をいふ。清曉漠漠露滿庭柯と云へば穩なれども平仄よ拘るが故に露滿柯となし爲に不穩とありたるなり。總て詩人は此等の境を知るを簡要とす。彼れ土れ人尤も穩字を得んが爲めに苦慮す。陸放翁の詩よも穩字入新聯とあり以て知るべきなり。一句の中に不穩の字あれば一句遂に穩ならず。一首の中に不穩れ句あれば一首遂に穩ならず。彼の土れ人は常に好詩ふ馴致せるを以て不穩の句い稀少なりと雖も本朝は即ち然らず。故に古より好詩少し。後進の者宜しく好詩に馴致せるふとを勤めざるべからず。

又分字ふして韵字を探り或い始めより韵礎を定めて作ることあり能く習得し深く鍛錬せざれば爲すこと難し。漢人も此を以て甚だ難事と

なず如何となれバ其探り得たる字を虚用せずして活用せんと欲するを以てなり。初學の者ハ輕字を得れば押し易しとなせとも詩人の域に至るハ從て輕字を苦吟そるものなり。是を以て却て難字を押し易しとなす。宗朝の時冠萊と云ふ人僧の惠崇と共に池亭に會し字を分て詩を賦す。冠萊は柳れ題にて青の字を得。惠崇ハ驚の題にて明れ字を得たり午より暮に到るも未だ共に句を成す能はず。漸くにして惠崇詩漸く成る。

雨歇方塘溢。遲回不復驚。暴鰌沙日暖。引步島風清。照水千尋迥
棲烟一点明。主人池上鳳。見爾憶蓬瀛。

と吟じ終て冠萊を顧て曰く。予明字を五回改作して漸く成れり。此詩の功蓋し明字に存ずるのみ。冠萊笑て曰く予も亦青字を以て主眼となす故に四回改作したれども未だ一も意に適せずと。遂ふ作ること能はず

して止むと云ふ以て押韻の難きと用意の深きとを窺ふに足るべし。驚の題にて明の字を押んと欲すれバ驚に寄せて雪毛明とか片翼明とか作らば何の難き事之れあらん。然れども是を明字を虚用するものあり棲烟一点明といふときは明字を活用せるなり。驚は元來潔白なる鳥なり是を以て水烟の中に居る處の他れものゝ皆な朦朧として分明ならざれども驚のみ特ふ明に見ゆるとなり。唯一点明と云はず棲煙一点明と云ふ是れ明字を活用せる手段なり。又柳の題ふて青の字を押すに於けるも則ち然り。冠萊れ詩才尚且作らざるハ其活用せんことを欲すれバあり。我國の詩人ハ概ね然らず分字の作多くは死字に押す又何の工妙かこれあらん。喩へハ生人と木偶人の如し。其觀同じく手足あり鼻目あり口耳あるも唯だ一點の生氣なし。故に古人曰く詩參活句莫參死句と。又人の詩韻を和するにハ元韻と同ふして其意を異になさんあとを

勤むべきなり。然れども徘徊嶙峋の如き連綿字は其原作の意に從ふも可あり。凡て和韻は篇を重ね句を積むあ從ひて作爲あがたし。此時に於て其作者の學力と才知とを見るを得ん。東坡の如きは博識洽聞なるが故に多作するごとふ却て秀作を出せり。昔茶の題にて腸れ字の和韻に曲几蒲團聽煮湯、煎成車聲遶羊腸と黄山谷が作りたるを東坡一讀して難字よ窮せずと歎息せると云ふ。韻に和して意を變ずるの力ある人は何百首を作るも其才學を運用そるあとを得べし。若し茶の題にて撑飢腸。洗俗腸等の字を押すときは和し易し。然るを茶の熟する音は車の阪に輾しる如く聞ゆと作る時は只に舊套を脱せるのみあらず茶に的當して好韻脚となるなり。

席上よて雅盟相會して互に詩を作るあ際して韻礎を定むるあとあり絶句にても律にても結句の韻に押すなり。分字なるときは律は何の句あ押すも可なり。礎はイシヅエと讀む。家を建るあは先礎を置き而して後柱を建て棟梁を横ゆるもれなり。詩も亦あれと一般なるを以て韻礎と名く。凡そ韻礎を定むるには其題によりて撰出するを要す。或い禽獸或は器機其他適宜の字を用ゆ。

分字とい坐客五人あるときは五言一句の字を分ちて韻となして作るを云ふ。韻礎とと坐客幾人ありと雖も一字に定めて作るを云ふ。今古人が花下述懷の題あて韻礎を定めて作りたる詩數首れ轉結を擧ぐ。

春遊願使群賢會。爛熳枝頭聚德星。

此詩い後漢の陳仲弓が諸子姪を從へて荀季和が家へ參會す。太史の宮奏して曰く。天に德星聚れり。五百里の中よ賢人の集れるあらんと云ふ古事より作れるなり。此花下の春遊に願くは賢人を多く會せしめて此

爛熳とさき盛りたる花枝の上に彼の德星を聚めたしとなり

枝頭早綴吳天雪。花外一樓壓落星。

此詩は吳國の落星樓より思ひ起りて枝頭の花は吳天の雪の如くなれバ此花外に樓閣ハ彼の落星樓よりは却て風景ハ良からんとなり。壓とハまさる意なり。

欲レ援騷客同春賞。花下春風馳使星。

其意は此花の盛時を獨賞せんも無念なれバ騷客を喚で共に詩にても賦せんと思ひて花下より使を馳せて友人を招き寄すとあり。使星とは星の名にて此星が使を主る故に之よりして使を直ゑ使星と云ふ。

對レ花可レ惜隔年別。不レ妨歸途毎戴レ星。

星を戴くとは夜に入ることをいふ。隔年別とは花は來春ならでは咲ぬ故なり。其詩の意は花を見て隔年別を惜むが故に花見の歸に毎に星を戴くも妨げと思はずとなり。

對レ花好約多春去。樹外幾經霜與レ星。

其意は花に對して幾年々も茲處にて花を見んと約し去れバ其樹下に幾年も花を見んとあり。星は夕に出て霜は朝に降る。是を以て星霜とは朝夕と云ふが如き意あり。花の題ゐ星の字を用ゆる頗る難事と謂つべし。此五首句意共に佳なり。初學宜しく翫味すべし。

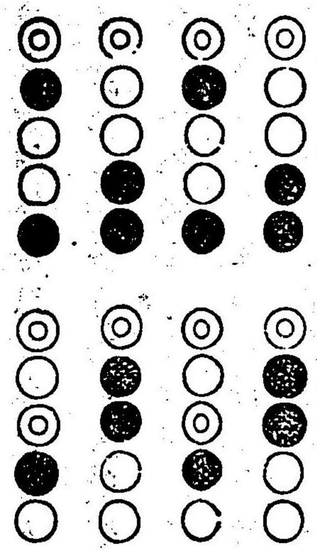
凡そ韻を和すと云ひ次すと云ふ。同じき事に似たれども較異れり。和とは元詩の韻を次するのみならず。意をも併せて受るを云ふ。次とは唯韻を次するを云ふ。

● 附錄

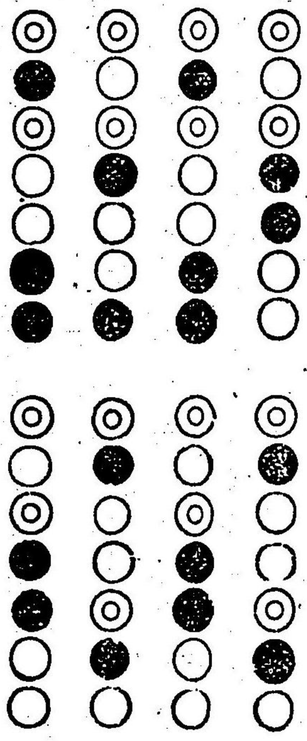
左に掲ぐるものハ何人も皆記臆せる所なるが筆の序に附記去置ぬ。又○印は平●ハ仄◎ハ平仄兩用と心得べし

◎五言七言律の作法　律は八句を以てなるものなり。第三第四を前聯となし。第五第六を後聯となす。聯とハ句意を對するを云ふ。喩へば梅の詩に疎影横斜水清淺。暗香浮動月黄昏と云ふが如し。疎影と暗香と對し横斜と浮動と對し清淺と黄昏と對するなり。而して五言ハ第二第四第六第八に韵を押し。七言ハ第一第二第四第六第八に韵を押すものなり。其外變体あれども今之を略す。

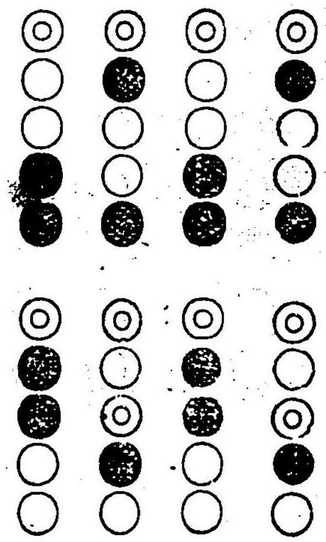
五言律平起



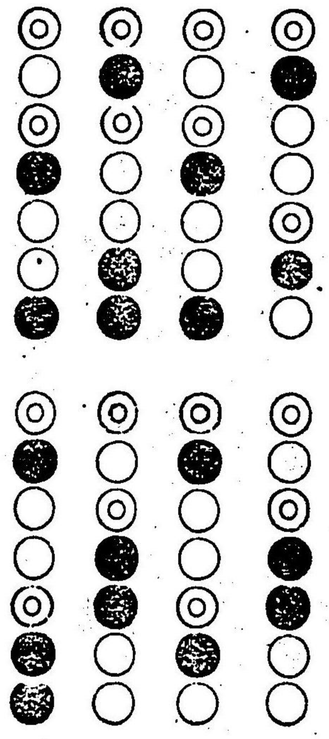
七言律平起



五言律仄起



五言律仄起



◎五言七言絶句作法　絶句は四句を以てなるものなり。第一を起句と云ひ第二を承句と云ひ第三を轉句と云ひ第四を結句と云ふ。起句にて其意を起こ。承句にて其意を承け。轉句にて其意を轉じ。結句にて其意を結ぶものなり。七言ハ起承結の三句に韻を押し。五言は承結の二句に韵を押すものなり其他變体あれども今之を畧す。

五言絕句平起

◎○○●●
◎●●○○
◎●○○●
◎○○●●

五言絕句仄起

◎●○○●
◎○○●●
◎○◎●○
◎●●○○

七言絕句平起

◎○◎●●○○
◎●○○○◎●
◎○◎●○○●
◎●◎○○●●

七言絕句仄起

◎●○○◎●○
◎○◎●○○●
◎○◎●●○○
◎●◎○○●●

作詩自在畢

明治廿五年三月二日印刷
同　年三月三日出版

正價金十錢

發行兼編輯者　東京市日本橋區本銀町三丁目十四番地　彌石門之助

印刷者　東京市日本橋區蠣殼町一丁目三番地　共遊舍　江尻芳次郎

發行所　東京市日本橋區本銀町三丁目十四番地　文林閣

◎賣捌所●東海堂●嚴々堂●信文堂●指金堂●上田屋支店●武藏屋●盛春堂●栗原書店●其他各店

日本詩文雜誌

毎月一日十五日の二回に發行す

本誌　江湖の文詩を蒐集し以て斯道の熾昌を期するものなり故ゑ斷金零玉猶漏すなく寸錦尺綺猶遺さなし今や我國詩文雜誌の發刊雨の如しと雖も或は文ゑ過ぎ或は詩に失す其兼全なるもの蓋本誌おるのみ若し之を疑ふものあらんか幸ゑ之を披け較を擇ち龍を斬るは文濤を捲き風を起すの章葩を吐き華を含むの詩光を騰げ輝を發するの賦誌上に紛然たるを見ん是れ資て以て文を練り詩を作るの良劑となすべく觀て以て憂を消し悶を遣るの良媒となすべきなり●江湖諸君の投書を募る

◎定價一冊金四錢郵税五厘○六冊前金郵税共二十五錢○十二冊前金郵税共四十八錢○廿四冊前金郵税共九十錢なり○郵券代用一割增の事

發行所　東京日本橋區本銀町三丁目十四番地　文林閣

栗本鋤雲先生題字◎嵩古香村田鶴汀兩先生題詞

石崎篁園先生序◎文林閣編纂

金玉詩集

本書は我國詩人の作詩中尤も金玉おるものを蒐集せるものなれば詩を學ばんと欲する人は常ゑ坐右ゑ欠ぐべからざる好材料ゑして定價は金二十錢郵税二錢なり

發行所　東京日本橋區本銀町三丁目十四番地　文林閣

H-60

作詩自在

国立国会図書館

特
6

098367−000−1

特49−655

作詩自在

文林閣

M25

DBV−0057